II—1　人類学からみた日本研究

（議長　吉田光邦）

J・G・ファン・ブレーメン

発表　J・G・ファン・ブレーメン

（I）

〈一九八〇年代までの日本研究の展開〉

この論文は、日本研究の対象と方法を、文化人類学の観点から考察したものです。

文化人類学に於ける日本研究は、一九三〇年代から始まりました。年と共にその研究は高まり、又、日本学との関連においても、現在多くの成果をあげています。

最近の文化人類学の日本研究例を取り上げその課題、方法論等を示してみます。言うまでもなく、日本研究の対象と方法は、歴史、社会背景により型づくられました。例えば戦争・平和・貧困・富・国際化・グローバル化・個人又は集団の行動といったものがそれです。ここではその詳細には触れません。しかし、思想・社会機構などを、私の分析においては重視します。

「日本研究」や「日本学」の定義としては国際交流基金が一九八五年に明かにしたものがあります。それによると「日本の現在や過去の文化や社会に関連する専門分野の総和」が『日本研究』『日本学』であり、この定義はヨーロッパ、アメリカ、アジアで受け入れられています。

北アメリカでは、一九七四年に「ジャーナル・オブ・ジャパニーズ・スタディーズ」（The Journal of Japanese Studies）の創刊号は、欧米人の日本研究について、次のように述べています。

「過去二五年間の西洋における日本研究の発展は実にめざましいものがある。……特にこの一〇年間においては、日本についての研究は主要な学問の中に組み込まれており、経済学・社会学あるいはその他の分野の理論がさまざまなかたちで日本のデータを取り込むようになっている。日本研究の専門家はいまや多くの専門分野から認められまたそれらとの強い一体感をもつようになっている。

と同時に、これらの専門がかかえる問題と関心を共有するようにもなってきているのである。このような新しい多様性が生じたために、あるいは生じたにもかかわらず多くの分野の日本研究専門家の間には強い納得しうる一体感が続いている。これはたんに言葉の学習や日本での体験という共通の問題のためばかりでなく、（日本という）特定の人々や文化への学際的関心というものにもとづいているのである。日本研究専門家の間にあるこの一体感こそが『ジャーナル・オブ・ジャパニーズ・スタディーズ』がそのために存在しているものなのである。」

ヨーロッパでは一九七三年に、日本研究家の間に高まりつ

つあった統合の気運を、「ヨーロッパ日本研究協会」(European Association for Japanese Studies)の第一代会長で民族学者のJ・クライナー(Kreiner)が、そのニューズレター第一号に次のように述べています。

「ヨーロッパの日本研究の先駆者たちは互に国境を越えた、緊密なそしてそれはしばしば個人的な接触を続けてきた。研究機関やセミナーや大学の日本研究の講座の設立といったものをともないながらも、これらの接触は弱められがちであり、分散化しあるいは孤立化したまま学問のセンターは存続してきた。日本研究の分野に関心をもつ学者のより密接な協力関係や交流の必要性を感じたことが、国や地域レベルの協力関係をつくろうという試みに発展したのである。」

クライナー氏は、日本研究に於いての日本の学者・知識人の重要性を特に強調しました。この日本人による研究の重要性の認識は当然であり、一九六〇年代から七〇年代にかけて北アメリカやヨーロッパ全体で明らかにされてきました。オランダの民族学者でジャパノロジストのコネリウス・アウェハントは、一九六九年にスイスのチューリッヒ大学の教授就任演説「日本学の西洋的・東洋的方法について」の中で、日本人学者の日本学に於ける重要性を指摘し、次のように述べました。

「西洋的な方法のみならず、東洋的な研究方法も重要である。否、とくに東洋的な研究方法すなわち日本的なジャパノロジーの方法を追求することが特に重要であると思われます。」

René Sieffert (1952—1953), Richard Dorson (1961), Cornelius Ouwehand (1976), Josef Kreiner (1976; 1984)が文化人類学や民俗学の観点から日本人による日本研究の考察をしてきました。

彼らは日本の民俗学・文化人類学などの研究・紹介の先導となりました。一九八〇年代には文化人類学者の間で、日本・欧米の学者により進められてきた研究の主題・方法についての交流が増えました。そして、今ここに討論する基礎ができたわけです。

一九八三年春、Folklore Societyの例会に於いて、カーメン・ブラッカー(Carmen Blacker)は、主旨演説に〝忘れられた日本の天才〟として、南方熊楠をとり上げました。同じく一九八三年、メーヴァルト(U. Möhwald)による、有賀喜左衛門の研究、そして一九八六年には、一九三〇年代に生まれた日本の経験社会学の概要の発表がありました。霊長類学からは、アスキス(P. Asquith)が、一九八一年に日本と西欧の霊長類学の類似性、相違点を指摘した画期的な問題提起がありました。日本でも戦後、人類学・民俗学そして関連分野

での日本研究の歴史・理論・方法論への関心が高まり、現在活発に議論されています。

一九七〇年に、山口昌男氏は、岡正雄記念論文集『民族学からみた日本』に「文化人類学と日本研究」を発表しています。それ以前の一九六〇年代には、石田英一郎氏の『日本文化論の理論的基盤』が、民族学と日本研究の問題点を述べています。

和歌森太郎氏は一九七六年、日本民族学研究の発展を旧派・新派という二つの概念から論議しています。その主旨は、新派は長期のフィールド・ワーク、そして地域比較研究・民族学的解釈に向かい、旧派は限定された主題の記録採取にとどまるというものでした。和歌森氏のこの見解は、一九七〇年代の日本研究の再考・再接近を促進し、日本の人類学者・民俗学者に共鳴されました。

小松和彦は中世文学専攻の筑土鈴寛の研究を一九七四年に発表し、民俗誌学と民俗学の差異を明らかにしています。民俗誌学は限定された主題、地域で民俗や伝承を記述・分類する事。民俗学は多くの地域から集められた民俗誌を比較検討し、心理学的・歴史学的などの方法により分析する事。そして、小松和彦は民俗誌学者として早川孝太郎を、民俗学者として折口信夫を典型としています。

八〇年代には、民俗学の新しい流れが、日本研究の中で際立ちました。それは隣接諸文化の考察ともいえます。

例を上げると、佐々木宏幹は、宗教の分野でシンガポールの華僑社会のフィールドワークを進め、彼の研究を深めました。井上順孝〔一九八三〕・中牧弘允〔一九八九〕が新宗教をとり上げ、ハワイ・アメリカ大陸の日系社会を研究しました。

文化人類学からの理論的影響の例として、飯島吉晴が一九八五年に「笑いと異装」で泣き笑いの儀式研究、「竈神と厠神」で家内神の研究を発表しました。飯島氏は、資料・記録と共に、民俗誌・民族学資料として、坪井洋文・宮田登などの提出した資料を参照しています。

そして、諸現象―習慣・神がみ・信仰・伝統・儀礼―の解明に山口昌男式の構造人類学が使われています。

福田アジオ〔一九八四〕、住谷和彦〔一九八二〕・伊藤幹治〔一九八八〕などにより、日本研究の業績・方法・理論・概念などが見直されています。大家の柳田国男・伊波普猷・早川孝太郎・堀一郎・古野清人・石田英一郎・桜田勝徳・和歌森太郎等が再評価されました。目的は民俗学と文化人類学に於いての日本研究の方法・叙述基盤を再考するものです。

八〇年代の日本研究の発展と拡大は新しい活動、業績により明確です。一つは、純粋学問として、継続した事。もう一つは情報・基礎的教育・知識を売ることにより自活できる「商業的」立場を獲得した事です。そして第三に社会問題の理解・対策の為の研究もされました。第一の例として、コロンビア大学のドナルド・キーン日本文化センター、そして、ハーバード大学ライシャワー研究所が上げられます。日本では、大阪の国立民族学博物館、千葉県佐倉の国立歴史民俗博物館、京都の国際日本文化研究センターが主なものです。

ヨーロッパからは、フランスの日仏会館、オランダの日蘭学会に続き、昨年、東京にドイツ日本研究センターを設立しました。

「商業」としての日本研究は、時代の要求により、商業・ジャーナリズム・政府を顧客とし、動きだしました。ヨーロッパでは、ロンドン大学の Imperial College の The Japan-Europe Industry Research Centre そして、オランダ・ロッテルダムのエラスムス大学で、Japan-kunde の講座が開かれています。日本の社会問題に関してはウィーン大学が著名です。

この三つの流れは、新旧の種々の基盤から成り立ち、広く学術・政治・商業の目的に合致するものです。その研究対象と方法は、旧来のものも、新しい試みも、混在しています。文化人類学的観点からの日本研究の意義、そして実際面での論争もあります。このような展開が文化人類学の日本研究に多様な作用をしています。そして次の疑問を起こさせます。一つは、八〇年代の日本研究の主題・方法等は実際に何であったか？　第二は、今からの日本研究に必要な望まれる主題・方法は何であるか？　第一問は、歴史事実として検討できます。第二問には、色々な解答が考えられますが、状況により変化しやすいものです。つまり、この問いの答えは常におこり、日々新しくなります。

（II）

〈八〇年代までの文化人類学に於ける日本研究〉

文化人類学者は各々の立場・観点から、日本を研究しています。日本を主題とし、又は日本を例証として取り上げます。それらは方法論、あるいはテーマ別により分類できます。

日本は各課題、専門のために研究されました。例えば、比較研究の資料として、あるいは仮説を試みるために、そしてある現象の調査などのために。初期の例では、国民性を主題

にしたG・ゴーラー（Gorer）やルース・ベネディクト（Ruth Benedict）がいます。二〇年後にクリフォード・ギアーツ（Clifford Geertz）はジャワと日本の社会形成を比較しました。F・シュー（Hsu）は中国と日本との家族制度、儒教道徳を比べました。これらの研究に共通する方法は、外から日本を見るということです。G・デヴォ（de Vos）は、専門の心理学・文化人類学と日本研究を合わせて、社会問題・差別・犯罪・自殺・教育・共同生活などを考察しました。

以上のカテゴリーに入る研究は八〇年代にもアメリカ・ヨーロッパ・アジアで見られます。日本では自国と異文化圏の研究者として、馬渕東一・大林太良などがおり、日本文化のみを研究した伊藤幹治などがいます。

他の専門分野でも文化人類学と同じ事が言えます。歴史学では、バーリントン・ムア（Barrington Moore. Jr., 1974, orig. 1966）、ペリー・アンダーソン（Perry Anderson, 1974）、カル・ウィットフォーゲル（Karl Wittfogel, 1976）が日本を範例とし仮説をたてました。ジョン・ホール（John Witney Hall）・デルマー・ブラウン（Delmer Brown）は日本を主題とした歴史学者です。日本文化、歴史全体を個人でマスターする日本学は少なくなりました。しかし、日本そのものへの関心は高く、健全です。各専門分野での研究を通して、日本社会の理解を促進しています。

特定の研究を通してその社会・文化の全体を見通すという「選択的全体主義」（selective holism）は、ヨーロッパの日本研究の一部です。例えば、オーストリアでは、S・リーンハルト（Linhart）が社会問題、特に老人問題に関わっています。又フランスではA・ベルク（Berque）が文化地理学で、日本個有の空間・風土・思想などに焦点を当て、イギリスでは、J・ヘンドリィー（Hendry）が日本の共同生活・社会組織、そして象徴的現象を明らかにしています。

（Ⅲ）

〈文化人類学と日本研究〉

日本民族学会編『日本の民族学一九六四―八三』に小松和彦・宮田登は日本研究に貢献した四人の外国人学者を挙げています。C・アウェアハント（Ouwehand）の鯰絵、C・ブラッカー（Blacker）のシャーマニズム、R・スミス（Smith）の祖先崇拝、J・クライナー（Kreiner）の南西諸島の宗教がそれらです。又、同書の中で、波平恵美子は、医療人類学部門で大貫恵美子（Emiko Ohnuki-Tierney）を紹介しています。

七〇年代には世界的傾向として、日本研究の協力体制が強化されました。地域的なものから、世界的なものに広がりました。一九七二年に設立された国際交流基金と一九七三年のヨーロッパ日本研究協会などはその代表的な例です。

この傾向は八〇年代も続き、次ぎの段階に進みました。七〇年代、八〇年代にかけて、日本研究の増大と細分化のもとに、さまざまな専門のワークショップが生まれました。

一九八四年に日本研究人類学研究会（The Japan Anthropology Workshop）が、そして、一九八七年国際アイヌ研究協会（International Association of Ainu Studies）が創立されました。これらの会は、専門家そして隣接諸科学者の国際的な集まりであり、日本に焦点を当てています。

（Ⅳ）

〈一九九〇年代の日本研究：集中と分立〉

文化人類学は、三〇年代より日本研究に影響を与え、それは増々大きくなっています。日本では、日本文化の源流を探るため、民族学者がアジア文明・文化を課題としました。このように民族学者と民俗学者とが多くの重要な貢献を日本研究にしました。しかし日本人学者が外国でのフィールド・ワークの機会が多くなるにしたがい、自国（日本）での研究が少なくなっているようです。

日本の文化人類学者の日本研究は、新しい方法と研究課題を拡大しました。岡正雄や石田英一郎等はヨーロッパの学説を、波平恵美子などがアメリカの学説を紹介し、日本の民俗学、人類学の日本研究に新しい理論、分野を導入しました。

総括して言えば、文化人類学における日本研究と、その他専門での日本研究の発展の流れは、戦後より現代に至るまで、アジア・アメリカ・ヨーロッパで同じ傾向が見られます。

一つの課題は、歴史の中における社会変遷の比較をすることです。日本（東アジア）とヨーロッパの文化・文明を比べると、構造的同一の部分と異形の部分が見られます。それはG・ドュメージィル（Dumézil）の唱えた〝インド・ヨーロッパ文明論〟に比べられないでしょうか。

文化人類学の日本研究と、その他の専門の日本研究は、ある状況・基盤を与えられるなら、将来に大きな可能性があります。

第一に、日本の本質的価値を理解するため、

第二に、各専門による研究の交流、

第三に、多方面よりの問題提起や方法論の探求、
第四に、門戸を広く開き、
第五に、資料の編纂のための協力などです。
そして、最後に、コミュニケーションの正確さと、迅速さが必要です。もちろん、組織と機構において、柔軟性が必要なのは言うまでもありません。

日本研究は世界的な広がりを持ち出しました。グローバルな交流が期待されています。文化人類学の日本研究は、全体的（地域・国別・大陸間）なつながりを必要としています。そして、そこから未来に、何が出て来るでしょうか？

ASQUITH, Pamela

1981 *Some aspects of anthropomorphism in the philosophy and terminology underlying Japanese and Western studies of the social behaviour of non-human primates.* Unpublished ph. D. dissertation, Oxford.

ANDERSON, Perry

1974 *Lineages of the absolutist state.* London : NLB.

BENEDICT, Ruth

1967 (orig. 1946) *The chrysanthemum and the sword. Patterns of Japanese culture.* London : Routledge & Kegan Paul.

BERQUE, Augustin

1976 *Le Japon, question de l'espace et changement social.* Paris : Flammarion.

1980 *La riziere et la banquise. Colonisation et changement culturel a Hokkaido.* Paris : Publications orientalistes de France.

1982 *Vivre l'espace au Japon.* Paris : Presse universitaires de France (translated in Japanese : *Nihon no kûkan bunka.* Tokyo : Chikuma Shobô, 1985).

1986 *Le sauvage et l'artifice. Les Japonais devant la nature.* Paris : Gallimard.

1987 "Some traits of Japanese Fûdosei," *The Japan Foundation Newsletter*, Vol. XIV/no. 5 : 1-7.

BESTOR, Theodore C.

1989 *Neighborhood Tokyo.* Stanford : Stanford University Press.

BLACKER, Carmen

1983 "Minakata Kumagusu : a neglected Japanese genius," *Folklore*, Vol. 94 : ii, pp. 139-152.

DE VOS, George A.

1973 *Socialization for achievement : essays on the cul-*

tural psychology of the Japanese. Berkeley: University of California Press.

DE VOS, George A., and Hiroshi WAGATSUMA

1966 *Japan's invisible race : caste in culture and personality*. Berkeley: University of California Press.

DE VOS, George A., and Hiroshi WAGATSUMA

1984 *Heritage of Endurance : Family patterns and delinquency formation in urban Japan*. Berkeley: University of California Press.

DORSON, Richard N.

1961 "Bridges between Japanese and American Folklorists," in *Studies in Japanese Folklore*. Bloomington, Ind., pp. 3-49.

FRIESE, Eberhard

1985 *Fritz Haber und Japan. Ein Vortrag zum fünfzigsten Todentag des Begründers des Berliner Japaninstituts*. Berlin: Verlag Ute Schiller.

FUKUDA, Ajio

1984 *Nihon minzokugaku hôhô josetsu. Yanagida Kunio to minzokugaku*. Tokyo: Kôbundô.

GEERTZ, Clifford

1963 *Agricultural involution. The processes of ecological change in Indonesia*. Berkeley: University of California Press.

HENDRY, Joy

1981 *Marriage in changing Japan*. London: Croom Helm.

1986 *Becoming Japanese : the world of the pre-school child*. Manchester: Manchester University Press.

HSU, Francis L. K.

1975 *Iemoto : the heart of Japan*. Cambridge, Mass.: Schenkman.

1986 "Confucianism and its culturally determined manifestations." In: *The Psychocultural dynamics of the confucian family : past and present*, Walter H. Slote (Ed.). Seoul: International Cultural Society of Korea, ICSK Forum Series No. 8, pp. 23-46.

IIJIMA, Yoshiharu

1985 *Warai to isô*. Tokyo: Kaimeisha.

1986 *Kamadogami to kawayakami*. Kyoto

ISHIDA, Eiichirô

1967 "Nihon bunkaron no riron teki kiban," *Nihon bunka kenkyûsho Kenkyû hôkoku*, 3, pp. 1-21.

ITÔ, Mikiharu

1988 *Shûkyô to shakai kôzô*. Tokyo : Kôbundô.

JAPANFORSCHUNG IN ÔSTERREICH

1976 Josef Lreinert, Ruth Linhart, Sepp Linhart, Peter Pantzer and Erich Pauer (Eds.). Vienna : Institut für Japanologie, Universität Wien.

JAPANESE STUDIES IN EUROPE

1985 Directory Series VII. Tokyo : The Japan Foundation.

KAWADA, Minoru

1985 *Yanagida Kunio no Shisôshi teki kenkyû*. Tokyo : Miraisha.

KNECHT, Peter

1985-1986 "Nihon de fieldwork wo kaiko shite", Part 1 & 2, *Senta Tsûshin/Center News*, Vol. X, No. 3 (pp.1-2) and No. 4 (pp. 1-2).

KOMATSU, Kazuhiko

1985 *Kamigami no seishin shi*. Tokyo : Hokuto shuppan.

KREINER, Josef

1976 Hauptrichtungen in der Erforschung japanischer Kultur-historische Entwickelung und gegenwärtige Probleme. In : *Japanforschung in Österreich*, pp. 293-314.

1984 Betrachtungen zu 60 Jahren japanishcer Völkerkunde. In memoriam Masao Oka, *Anthropos*, Vol. 79, pp. 65-76.

LEE, Changsoo, and George A. DE VOS

1981 *Koreans in Japan : ethnic conflict and accommodation*. Berkeley : University of California Press.

MÖWALD, Ulrich

1983 *Soziologie der japanischen familie ? ARIGA Kizaemons Beitrag zur Erforschung ländlich-familialer Strukturen, 1933 - 1943*. Bochum : Studienverlag Brockmeyer.

1986 *The emergence of sociological empirical research in Japan during the 1930s. An overview*. Berliner Beiträge zur sozial-und wirtschafswissenschaftlichen Japan-Forschung, Occasional Papers No. 60. Berlin : Verlag Ute Schiller.

MOORE Jr., Barrington

1974 (orig. 1966) *Social origins of dictatorship and domocracy Lord and peasant in the making of the modern world*. Harmondsworth : Penguin Books.

NAKAMAKI, Hirochika

1986 *Shinsekai no Nihon shûkyô*. Tokyo : Heibonsha.

NAMIHIRA, Emiko

1984 *Kegare no kôzô*. Tokyo : Seitosha.

1985 *Kegare*. Tokyo : Tôkyôdô shuppan.

NIHON MINZOKUGAKU NO KAIKO TO TENBO

1966 Nihon minzokugakkai (ed.). Tôkyô : Minzokugaku shinkôkai.

NIHON NO MINZOKUGAKU 1964-1983

1986 Nihon minzokugakkai (ed.). Tôkyô : Kôbundô.

OUWEHAND, Cornelius

1976 (orig. 1969) "Über westöstliche Wege der Japanologie." In : *Japanforschung in Österreich*, pp. 281-292.

1985 *Hateruma. Socio-religious aspects of a South-Ryukyuan island culture*. Leiden : Brill.

SASAKI, Kôkan

1984 *Shamanism no jinruigaku*.

1986 "Hyôrei to shûkyô bunka oboegaki. Singapore no ichijosei dôkei no shamankakatei." In : *Mabuchi Tôichi sensei koki kinen shakai jinruigaku no shomondai*. Tokyo : Daiichi shobô, pp. 265-284.

SEKIMOTO, Teruo

1988 "Research methods in Japanese Studies : Cultural Anthropology." In : *Orientation Seminars on Japan* : No. 31, pp. 1-10. Tokyo : The Japan Foundation. Office for the Japanese Studies Center.

SIEFFERT, René

1952-1953 *Etudes d'ethnographie japonaise*. Tokyo : Maison Franco-Japonaise.

SILVERMAN, Cheryl

1988 "Research methods in anthropology in Japan." In : *Orientation Seminars on Japan* : No. 31, pp. 11-14. Tokyo : The Japan Foundation, Office for the Japanese Studies Center.

SLAWIK, Alexander

1976 (orig. 1972) "Auseinandersetzung mit der tranditionellen Japanologie." In : *Japan forschung in Österreich*, pp. 229-246.

SUMIYA, Kazuhiko

1982 *Nihon no ishiki. Shisô ni okeru ningen no kenkyû*. Tokyo : Iwanami Shoten.

SUMIYA, Kazuhiko, TSUBOI Hirofumi, YAMAGUCHI Masao, MURATAKE Seiichi

1987 *Ijin. kappa. Nihonjin. Nihon bunka wo yomu*.

Tokyo : Shinyôsha.
TAKEMARA, Takuji (Ed.)
1986 *Nihon minzoku shakai no keisei to hatten. Ie, mura, uji no genryû wo saguru.* Tokyo : Yamagawa shuppansha.
WITTFOGEL, Karl A.
1976 *Oriental despotism. A comparative study of total power.* New Haven : Yale University Press.
YAMAGUCHI, Masao
1970 "Bunka jinruigaku to Nihon Kenkyû." In : *Minzokugaku kara mita Nihon.* Tokyo : Kawade Shobo shinsha, pp. 429-434.
YANAGAWA, Keiichi (Ed.)
1983 *Japanese religions in California. A report on research within and without the Japanese-American community.* Tokyo : University of Tokyo, Department of Regious Studies.

コメント　**濱口恵俊**

一九三〇年代から一九八〇年代までの、内外の文化人類学的な視点からの日本研究を広くオーバーヴューしておられまして、日本研究全体に対する文化人類学の貢献をかなり肯定的に評価されました。その博学な知見に関してはただただ敬服するばかりであります。

そこでは一九八〇年代の日本研究の動向といたしまして、二つの流れがあるということを明確に指摘なさいました。一つは、アカデミックな立場からの研究機関の設立であります。当然日文研もその中に入っているわけであります。もう一つは、日本の経済的な急成長に伴って実際上の諸問題を調査研究するという、言わば産業ジャーナリズムや行政からの要請に応えるという形での研究組織の設立であります。前者のアカデミックな立場からのアプローチに関しましては、だれしもが知ることがらでありますが、後者における日本研究については日本人自身はあまり関心を払っていなかった点でありまして、そのような社会的必要性があるということをこの報告によって改めて再確認させられたわけであります。

実際日本では、例えば日本的経営というものについて、本当にまともな立場からの研究はなされていないように思います。日本的経営を強調するということは、日本の傲慢さ、ジャパニーズ・アロガンスを助長するものとして、かえって敬遠されている嫌いがあるわけであります。それからまた、ジャーナリズムで続々と出てきております日本論関係のいろいろな文献、これもベフハルミさんの表現を借りれば「大衆消費材としての日本文化論」でありまして、実はそこに宿されている豊かなデータとか、あるいは鋭い分析視点などがどこかへ置き忘れられるようなことも多かったわけであります。こういう事態を考えますと、ブレーメン報告におけるように、日本研究への動機というものをもう一度考え直し、それを正確にとらえるということが必要であるだろうと思いました。

この論文における第二のメリットといたしましては、文化人類学的な視点からの日本研究に二つの基本目的があるということを指摘なさった点であります。第一のタイプは、言わば外側からの視点によるものであります。つまり、日本をある種の問題追求、例えば比較研究、あるいは仮説の検証、あるいは分類作業、こういったものに役立つような一つの事例として取り上げる。あるいは、日本を研究材料としてのみ用いていくという立場からの日本研究であります。もう一つは、それとは対照的に、内在的な立場から日本それ自体を研究のレファレントに据えまして、その固有の属性を専ら解明しようとするものであります。

この二つの傾向を明確に指摘なさったわけでございますが、特に後者に関しまして「セレクティヴ・ホリズム」と称される研究傾向についてご指摘があったわけであります。第一のほうに関しましては、これは言わば何らかの一般法則を発見するということを狙ったものであり、しかも欧米起源の理論を日本へ無条件に適用するという前提に立っているきらいがあり、そこに問題があろうかと思うわけでありますが、報告者はむしろ内在的立場のほうからの研究を重要視しているようであります。その場合、「セレクティヴ・ホリズム」という特定領域、専門領域に焦点を合わせながら、日本社会の全体の解明に向かうという傾向を重視なさっているように見受けたわけでありますが、この観点は昨年のこの集会におきまして園田報告において強調されました外国研究としての日本研究におけるジャパニーズ・スタディーズに対応しておるわけでありまして、誠に興味深いわけであります。

ブレーメン報告は非常に重要なポイントを指摘していらっしゃいますが、若干の難点をも含んでいるように見受けられます。

まず第一に、文化人類学的視点からの日本研究についての詳細なオーバーヴューはなされているわけでありますが、それら全体についての報告者自身の批判を欠いているわけであります。特に、方法論的な問題点についての具体的な指摘に乏しいというふうに思います。文化人類学的な立場からの日本研究に固有な方法として、一体どういうものがあるのでしょうか。

第二に、この報告におきまして、日本研究一般と文化人類学的視点からの日本研究とを明確に区別した上で論じなければならないと思われるわけですが、その二つを十分識別しなければ、後者の前者に対する研究上の貢献は明確化され得ないわけであります。他の社会科学に基づく日本研究との対比を行うとすれば、文化人類学的視点からの日本研究は、いかなる独自の視点と方法によって日本研究に貢献することになるのでしょうか。

私自身の見解を少し申しますと、文化人類学的な視点からの日本研究、特に自国研究としてのフォークロアによる研究は、日本文化に固有のイーミックスを掘りおこすことによって、他の社会科学の立場からの分析においてとかく見落とされがちである文化の機能的意義を明らかにすることにあると考えます。その点において、文化人類学的視点からの日本研究の日本研究一般に対する貢献を認めるべきだと考えますが、その点はいかがでしょうか。

それから第三に、日本ないしアジアと欧米の文化や文明は、共に構造的変異体、ストラクチュラル・ヴァリアンツというふうにおっしゃって、同一の性格のものだと見なしていらっしゃいますが、この考え方は妥当でありましょうか。

言及されているフランシス・シューあたりは、各社会の原組織形態が基本的にむしろ異なるということを実証したわけであります。これは彼の『クラン・カースト・クラブ』において展開されております。特に日本では、いわゆる家元制度というものを範形とするような、カタカナ書きでありますが「イエモト組織」が発達して、欧米の原組織形態であるクラブと対比され得るとしているわけであり

ます。このシューの研究自体は、ついでながら申しますと、日本で実は十分なフィールドワークを一年間行った上で書かれたものでありまして、決して報告で述べられてるようなスタディ・アト・ザ・ディスタンスのものではございません。心理人類学的な立場から実証的研究を行ったものであります。

それから第四点といたしまして、この報告において重要な文献が若干洩れておるような気がいたします。統合的な社会科学の立場から日本研究を行ったものとして、村上泰亮・公文俊平・佐藤誠三郎の『文明としてのイエ社会』という重要な本があります。それから文化人類学的な視点、特に社会人類学的な立場からの日本研究としては、ご承知の中根千枝『タテ社会の人間関係』といった文献があるわけでありますが、これらに関しての評価はいかがなものでありましょうか。それからもう一つ、最近文化人類学の中ではルース・ベネディクトに対する再評価が行われておるわけでありますが、それについてのもう少し詳細なコメントも必要ではなかったかと思います。

それから第五点といたしまして、内外の多くの日本研究というものは方法論的な個人主義というパラダイムになっておりまして、個人というものを人間モデルの分析の第一の拠点に据えているわけであります。従って、その場合には、日本社会、あるいは日本文化の中で生活する人間は、自律的行為主体としての属性を欠いた存在、そういう欠如体として描かれやすいわけでありますが、そういう点についての指摘も見られなかったわけであります。日本研究における研究パラダイムの問題に関して、何らかの問題がありはしないかというのが私の最後のコメントであります。

吉田　ありがとうございました。幾つかの問題が出ましたが、ブレーメンさんいかがですか。

ファン・ブレーメン　まず、シューはもちろん日本でフィールドワークしたことがあります。私の意味では、心理学から見た日本はアト・ア・ディスタンスということでしたが、おっしゃった通りそれは言わなかったほうが良かったかもしれません。日本の社会組織に関して大事な研究だと思います。

そして第四のコメントについてですが、もちろん日本人学者の研究への言及はこの論文では不十分です。一〇年にわたって日本文化の源流の研究が民博であります。その研究成果を見ると、非常に興味深いのですが不勉強な私は、まだそういう大きな研究は全部読んだことがないので、この論文の中に入れませんでした。

イミックスという言葉を濱口先生がおっしゃったんですが、日本人の研究者はイエとかムラとか、そういう概念を使って日本の社会を分析しています。私の論文に述べた福田アジオさんは、日本の社会学の概念を民俗学から出てきた概念を使って自国の文化を分析しています。私たち外国から来た文化人類学者は、どういうふうにやればいいのか。あるいは私たちの論文の中にもイエとかムラとかそういう概念をそのままに入れるか、あるいは翻訳するか。そして翻訳すれば、どういうふうに訳せばいいのか。ムラは“village”なのか、イエは“family”なのか。そういう概念的問題が未解決のままです。

第一に指摘された点についてですが、日本研究とか日本学とかには、もちろん大きな違いはあります。この論文の中でも日本研究とか日本学という言葉を使って、ちょっと違うニュアンスを表現したかったのです。しかし、国際交流基金のデフィニションを見ると、日本で日本研究と日本学とを区別しているとは思えません。世界中でも今は大体ジャパニーズ・スタ

ディーズという言葉を使っています。私はジャパニーズ・スタディーズとジャパノロジーをはっきり区別するほうがいいと思います。

私はジャパノロジーという言葉分野も捨てたくない。なぜかと言うと、各専門の研究は、細かい研究をだんだんやってきます。しかし総合的な視野も必要だと思います。昔のジャパノロジーは、一人の人が全部の日本の歴史、文学をやろうとしてきました。それは現在ではできないことです。しかし、研究グループとしてはできるかもしれません。今の新しいジャパノロジーというのは、各専門の細かい研究をふまえたうえで総合的なレベルに上げたものだ思います。だからそれは新しいジャパノロジーと言えます。そのほかの各専門の研究は、ジャパニーズ・スタディーズと言っていいでしょう。

吉田　それでは、自由なディスカッションに移りたいと思います。

スラジャヤ　クリフォード・ギアーツの研究に関連したことですが、ギアーツは、ご存じのようにジャワ社会を人類学的に細かく分析します。私は歴史の専門ですから、文化人類学的な方法、あるいは分析はあまりわかりませんが、しかしクリフォード・ギアーツのジャワ社会の分析は、私が見た限り単純すぎると思います。

なぜかと言うと、ギアーツはジャワ社会を二つに分けるわけです。一つはサントリーヌ・モスレムという社会パターンがあるんです。もう一つはアバガンのモスレム社会パターン。それ以外にインドネシア語でカプリチャイアンと言いますけれども、シャマニズムという形でいろんな小さな宗教がありますけれども、あまり触れておりません。そういう形のジャワ社会はあまり分析になりません。また、新しいことにもあまり触れておりません。そして日本の社会パターンと比較するわけなんです。

私の見た限り、こういう比較では日本の社会はなかなかわからないようになるということになります。人類学のアプローチになにか欠陥があるのではないかと思います。つまり、ギアーツの場合は、ジャワ社会を分析する時に社会パターンを使うわけですね。日本社会を見る時もルース・ベネディクトも言っているようなジャパニーズ・カルチュラル・パターンを使うわけなんです。私は、もしシンクロニック的な方法で見れば、日本の社会とかインドネシアの社会がもっとわかりやすいんじゃないかと思っておりますけれども、その点については先生はどう考えておられますか。

ファン・ブレーメン　今のご質問、私はギアーツから始めましょう。ギアーツの例を取り上げるのはなぜか。そのギアーツの研究は非常に私が言いたかった例なんです。日本社会の理解も分析も不十分、しかし日本関係資料を使って日本の社会を例としています。彼は基本的には宗教と経済の関係に興味がありました。私はインドネシアスペシャリストではないが、いろいろ批評でジャワの分析も不十分だということを読んだことはあります。ギアーツは日本に、実は興味がない。興味あるのは宗教と経済との関係、そして社会の発展と形成。日本はそのような理論の一例証として意味があったということです。ギアーツは有名な例ですから、選んでみました。

上野　濱口先生のコメントが大変総括的でしたので、私はほぼそれに賛成いたしますが、一つだけ補足したいと思うことがあります。

ブレーメンさんは、方法論について、人類学的な方法論と民俗学的な方法論、これが相互に肯定的な関係を結んでいるというふうにおっしゃいました。確かにその点もあるんですが、当事者としてその世代に属する人間としては、人類学と民俗学の方法論的な関係が単に協力の関係ではなくて、非常に鋭い対立を含んでるということを常日ごろ感じております。と申しますのは、人類学的な方法論というのは常に普遍主義的、と言って悪ければヨーロッパ的なところがあるわけですし、民俗学的な方法論は言わば土着的な方法論です。

例えばブレーメンさんのおあげになった小松和彦さんは私と同世代の研究者ですが、彼が出発したのは構造主義人類学からでした。彼は、その後構造主義を離れて、民俗学のほうへ向かったかのように見えますけれども、私の目から見れば、彼の特徴は他の民俗学者と比べても際立った理論性にあります。日本語で言うと、私はいつも衣の下に鎧が見える「隠れ構造主

義者」というふうに呼んでおります。

そういう意味では、小松さんや私のような世代の人間は、幸か不幸かヨーロッパ的なディシプリンで人類学や社会学の教育を受けてきたわけですね。そうしますと、外から見た日本というのは必ずしも外国人が見た日本ということを意味しない。逆から言えば、日本人が見た日本が必ずしも内から見た日本を意味しないという事態にたち至っているわけです。

私自身がやった仕事の中で、日本の天皇制をレヴィ・ストロースの理論を使って構造主義的に分析するという比較王権論の仕事をいたしました時に、その仕事は歴史学者や民俗学者から大変手厳しい批判にあいました。それは、天皇制というものは単なる王権ではなくて、天皇制そのものであって他のなにものとも比較できないという、そういう論議でしたけれども、そういう意味では、人類学的な方法論を身につけながら民俗学に近づいている研究者、私どもの世代の多くは、単に調和の関係ではなくて、非常に引き裂かれた関係をその中に見ていると思えます。その点についてブレーメンさんがどうお感じなのかお聞きしたいと思います。

ファン・ブレーメン　ヨーロッパでもその対立はあります。例えば小松さんはアウアハンドと鯰絵研究をほかの三人学者と翻訳して、オランダの構造主義の影響を受けた。国文学者を例にとったら、中世日本文学研究者の筑上鈴寛も構造主義的な考え方があった。もう一つ、例えば福田アジオも早川孝太郎は構造主義者であるという論もあります。理論は国とはあまり関係ない。構造主義は日本のものでもない、フランスのものでもない。あちこちで生まれた考え方ですから。そういう理論をもとにして本当に国際的な研究ができると思います。民俗学と民族学の関係もそれは同じ話です。区別することもできるし、ある面では同じ学問でもあると言えます。

モーラン　これは質問よりコメントではないかと思いますけど、ジャパノロジーという言葉が出ましたが、日本学やら日本研究と「日本」という言葉を使ってしまうと、それはある意味ではすごくイミック的なところから研究意識が始まるんです。上野先生もおっしゃったように、イティック、外からの視覚から研究しないといけないんじゃないかと思います。いつまでも日本学やら日本研究、昨日話が出ましたけど、日文研は国文研にするかというアイデアもあったんですけど、日本に集中すると、結局そういう一般的な研究はちょっと危なくなってくるんじゃないかと心配しております。

もしジャパノロジーという言葉を使うのなら、そういうジャパノロジーの意味は明確に説明しないといけないんじゃないかと思います。それとも、完全にジャパノロジーやら日本学、日本研究は廃棄するという考え方も取れます。

ロコバント　先ほどの純粋学問と商売学問の問題ですが、この様な区別は意味がないと思います。ドイツに関して、二つの例を挙げたいと思います。

純粋学問の例として、東京に新しくできたドイツ日本研究所を挙げられましたけれども、その管轄官庁はドイツの研究技術省であって、その目的はドイツの官庁・経済界などに日本に関する基礎的なデータを提供することです。もちろん基礎的研究はやりますが、ただ、それはいずれ応用するのが目的です。

そして一番極端な例は、ドイツの日本学の創立者と言うべきカール・フローレンツ教授です。フローレンツは『日本書紀』や『古事記』の翻訳などをした純粋の学者なんですが、一九一四年にハンブルク大学の初代の日本学の教授に任命されました。ハンブルクの市政府の指導層の中には、彼を雇って日本学の講座を設ける理由として、ハンブルクの商人にとって役に立つと考えた。まあ、実際に役立ったかどうかは知りませんけれども。結局その動機から見て学問を二つに分けること、特に純粋学問と応用学問を区別しようと云うことは実際問題としてできないんじゃないかと思うんです。

ファン・ブレーメン　でもできると思いますね。目的を見ればわかるはずだ。もちろん一つの研究所の中に、いろいろアプライサイエンスとかピュアサイエンスという区別はあるわけです。

ロコバント　同じものが両面を持っている。

ファン・ブレーメン　でも違うと思いますね。例えばアプライサイエンスだって、それもサイエンスでしょ。

ガーストル　さっきのギアーツのことに戻りますが、たまたま二年前にギアーツ先生と話す機会がありまして、「日本をなぜ対象にしませんでしたか」とか聞くチャンスがありました。ある時期、日本に何ヵ月いて、日本人の研究者と一緒に研究を始めましたそうですが、本格的に日本のことをやろうと思ったことがあったそうです。そしてその時、問題となったのは言葉と日本の学問の蓄積でした。文化人類学は、出発点は南太平洋の島々、つまり文字がないところの研究として始まりました。ところが日本研究は根本のところが異なっています。ギアーツが結局あきらめたというのは、日本の言葉の問題ももちろんありましたが、なによりもやはり日本の学問がもう大分発達してるし、これを無視しては研究にならないということで、あきらめてやめたということです。だから日本を研究することに興味ないことはないんですよ。

これは大きな問題点だと思うのです。外との比較という立場になりますが、日本がちょっと特殊な点は、日本内の学問の根が深いという点です。少なくとも一八世紀の国学とかありますから、それを無視して研究できないわけです。できるでしょうけれども、深みのある研究は実際はできないでしょう。しかも日本語は難しいほうですし、かなり大人になってから日本語を始める人が多かったですから、もし例えば文化人類学に絞るんでしたら大きな問題だと思うんですね。今まで実は文化人類学の中では日本研究は全体から見ればほとんどないぐらい少ない。

そして、ギアーツさんもこの間ある本にベネディクトさんのことを書きましたが、それにはやはり日本のことを文化人類学者の中では“impossible other”という言葉を使いましたけど、日本語に直せば「どうしても解けない他国」という意味でした。質問になりませんが、そういう問題を提起したかったんです。

ファン・ブレーメン　これはおもしろい問題提起です。文化人類学の中で、日本研究は少ないです。アメリカの文化人類学者は、まず日本に行って、自分で日本の社会を研究した。日本の学問はあるけれども、あまり使わなかった。使ったのは政府リポートぐらいだけ。でも、六〇、七〇、八〇年代になると、まず日本の文献を研究していく。そして日本の学問を使う。ジャパニーズ・アロガンスじゃなくて、ウェスタン・アロガンスは少なくない。ベネディクトなどはウェスタン・アロガンスは強かった。エンブリーもそうかもしれないです。日本の社会を研究する時日本の学問を全然使わなかった。日本に社会学とか人類学はあったかどうかというのは関係ない。今の世代になると事情は、全く違う。

吉田　ありがとうございました。もうそろそろ時間が来ておりますが、最後の発言としてよろしく。

セイズレー　先ほどの商売としての日本研究についてもうちょっと考えてみたいんですけれども。私の質問、あるいはコメントは素朴なものだと思いますけれども、商売としての日本研究はまじめな研究ですかということです。つまり、日本研究のブームがありましたけれども、その中で商売としての日本研究は著しく発展しました。しかし、学問としての日本研究は、ある程度まで発展したわけですけれども、印象としてはちょっと今の段階では遅れてしまってるんじゃないかというように思いますけど。つまり、商売としての日本研究と学問としての日本研究は、むしろ対立的な関係に置かれているんじゃないか。こういう印象を受けますね。

ヴィシュワナタン　先ほどの先生のお話からも、昨日のお話もいろいろありまして、一つはっきり出てくるのは、例えば外国人が日本研究をすると、日本語をもとにして日本の研究をしようと思っても、日本に長く住むこともできないし、日本の資料とかそういうことが不勉強のこともあるから、共同研究の形にならないといい研究が出てこないと思います。今まで日本の学者が自分でもちろん優れた研究をなさっていらっしゃって、それをもとにして外国人が日本研究をするという形になってますけれども、今の時

代には、もう外国人も入れた共同研究の時代になってきたのではないかと思います。

もう一つ、問題だけ出しておいて後でコーヒーブレイクの時にでも教えてくだされば よろしいですが、例えば方法論には国籍がないというような印象を受けましたけれども、それはもっと議論すべき問題ではないかと思います。例えばリバリズムとマルキシズムと言っても、どういう段階をもってその方法論が出てきたかということも考えなければならないし、それをそのまま普遍的な方法論だと思って、どんな国にも当てはまるとすると、問題があると思います。以上です。

吉田　ありがとうございました。

大分時間も超過しましたんですけれども、最後に非常にいいご意見をうかがいました。共同研究の必要性、あるいは方法論には国籍があるのかないのかというこういう問題、これは実はこれをテーマにしても相当意見が沸騰するかと思います。それからまた、先ほどのお話のように、ピュアサイエンスかアプライサイエンスかという場合に、日本研究は一体ピュアなのかアプライなのかと。そういう問題というのも、またいろいろ皆さんの今後のディスカッションのテーマになり得るかと思います。